

# 子どもの隠された力を引き出そう

—第1学年『えんこう川たんけんたい』になって—

今村昌禎・福田秀範

## 1 はじめに

### (1) 学習で目指す点

子どもたちは、日々周りの環境からいろいろなことについて、興味をもち、生まれながらにもっている感受性を十分に発揮して、驚いたり不思議に思ったりしている。しかし、そのことについて立ち止まって振り返る機会がないと、すぐに心の中から忘れられたり、追求していく意欲が薄れたりしてしまう。子どもたちが住む環境によっても、直接体験の種類や範囲、深まりが限定されてしまっている。

そこで、共通の直接体験を味わわせることにより、子どもたち同士が周りの環境に興味を抱いて、互いに刺激し合いながら意欲的に取り組む姿勢が生じてくる。さらに、準備・取り組む内容の選定・活動・片付け・表現・振り返りを自分自身で考えてやりこなしていくことにより、『自分と環境のかかわり』を考えるようになる。そして最終的には、『自分とはどんな人間なのか気づく』手掛かりにもなっていくと考えられる。

低学年における総合的な学習において、まず環境や環境問題に関心をもつ出発点として、

◇ 自分を取り巻く環境に進んでかかわることができる。

◇ 体験活動を通して、自然（喜び・かわいらしさ・楽しさ）を感じることができる。

の2つの力を子どもたち自らが自然につけていこうとする姿勢を目指していきたい。

### (2) なぜ猿猴川に行くの

本校の東側を流れる猿猴川へは、およそ10分で歩いて行ける。太田川の支流で、川に住む生物と川の水の汚れを合わせもつ川である。

子どもたちが、興味を注ぐものとして考えられるものは、カニ・泥・ヤドカリ・クラゲ・貝・ゴミ・石・魚・鳥・船・潮の干満などがあげられる。子どもたちの個性に応じて多様な課題をもつことができ、興味を抱いて意欲的に活動することができると考えられる。

さらに、猿猴川で活動したことを『水』というテーマにおいて、将来いろいろな環境や環境問題を考える際の土台になっていくことも考えられる。



### (3) 学習のこだわり

- ① いろいろな活動をする際、子どもたちが必ず自己決定・自己選択をするようにする。
- ② 子どもたちが興味あることを見つけたり、その興味を追究したりするように、支援的・激励的な言葉かけや教室環境づくりをする。
- ③ 子どもたちの欲求を満足するために、そして、体験の違いを比較したり、発展的にしたりするために、9月と11月の2回に活動を集中的に組む。
- ④ 体験活動の表現交流の場を設けることによって、自分なりのこだわりを明確にしたり広げたりするようにする。

- ⑤ 生き物の生命の尊さについて考える場を設ける。

## 2 学習の概要

### 【実践1】—えんこう川〇〇たんけんたい—

#### (1) めざす子ども像

- ① 自分を取りまく自然に進んでかかわろうとする子ども  
 ② 自分の感じたことを楽しみながら自分なりのやり方で表現しようとする子ども

#### (2) 活動計画

##### ① 9月のたんけんたい（全12時間）

えんこう川へたんけんに行くよ (4.5時間)		たいちょうになって しゅっぱつ (4時間)	大はっけんをきいて みて (2.5時間)	つぎは、 どうしようかな？ (1時間)	
【動機づけ】 学習の予告を聞く どんな探検をする のか考える 探検の準備物を考える	【体験活動】 カニ・ヤドカリとり 泥遊び カニ・ヤドカリの観察	【次の体験活動への準備】 いろいろな大発見の交流 次の探検の計画 準備物の工夫	【体験活動】 カニ・ヤドカリとり 生き物の家しらべ 貝殻さがし 表現交流の簡単な準備	【活動の表現交流】 隊長の大発見を伝える 他の隊長の大発見 を見たり聞いたりする	【まとめ・次の導入】 自分の探検をふりかえる 次の探検について考える

##### ② 11月のたんけんたい（全10時間＋常時活動）

今はどうかな？ 9月とちがうかな (2時間)	えんこう川〇〇たんけんたい しゅっぱつ！ (4時間)	〇〇になって たのしかったことを伝えるぞ！ (3時間)	はっぴょうかいをしよう (常時活動)	つぎは、どんなたんけん しようか？ (1時間)
【動機づけ】 9月の探検隊のビデオを見る どんな探検をするか考える 探検の準備物を考える	【体験活動】 カニ・ヤドカリとり 生き物の家の観察 ゴミ調べ 泥の不思議見つけ 川の干満不思議調べ	【活動の表現】 表現方法を考える 何になって伝えるか考える 表現する 絵・紙芝居・模型・変身 詩・歌など	【活動の表現交流】 〇〇になって伝える 目と耳と心で聞く 良い点や気づきを言う	【まとめ・次の導入】 自分の探検をふりかえる 次の探検について考える

#### (3) 子どもたちの反応

##### ① 9月のたんけんたい

###### ア 準備物

あみ・虫かご・釣りざお・長靴・サンダル・着がえ・シャベル・双眼鏡・虫メガネ・懐中電灯 など

川で活動することの体験不足からか、親のアドバイスも受けながら、子ども自身が考えた物をもって来てはいるが、結局使いこなせない場合があった。

###### イ 探検内容（2回目／探検で楽しく感じたこと）

- ◇ カニたんけん（94.9%）
  - ・捕らえる（48.7%）
  - ・生態を調べる（38.5%）
  - ・家を探る（7.7%）
- ◇ ヤドカリたんけん（2.6%）
- ◇ クラゲたんけん（2.5%）

###### ウ 活動の様子

- ◇ 川で活動することの体験不足からか、まず泥に足を奪われて身動きが取れず、まわりの人に助けをもらう子どもがかなりいた。そのことで、活動を少し拒絶するようになった。
- ◇ 計画とは異なる活動をしてしまう子どもが多かった。
- ◇ 最初は、なかなかカニ・ヤドカリを触ることができなかったが、時間が経つにつれて、触れるようになり捕らえようとしていた。
- ◇ 長靴・サンダルなどの紛失も続出した。
- ◇ 探検後、準備物の片付け（きれいに洗うも含む）や着替えなどをスムーズにできない子どもが多かった。

#### エ 表現方法

ほとんどの子どもが、絵・図を描いて、それを見せながら言葉で、探検したことや大発見したことを伝えていた。

表現の場を一度に設けてしまったために、聞くことに対して途中から集中力が欠けてしまった。

### ② 11月のたんけんたい

#### ア 準備物

あみ・虫かご・釣りざお・長靴・サンダル・着がえ・シャベル・双眼鏡・虫メガネ・懐中電灯・作ったわな・メモ帳・石・えさ・図鑑・木の棒・軍手 など（太字は9月にはなかった）

9月の体験を生かして、ケガをしないためにとか、ぬれないためにとか、カニを捕まえるためにとか、目的に応じて考えた物を準備するようになった。

#### イ 探検内容

- ◇ カニたんけん (76.9%)
  - ・生態を調べる (59.0%)
  - ・家を探る (10.2%)
  - ・捕らえる (7.7%)
- ◇ ヤドカリたんけん (12.8%)
- ◇ エビたんけん (5.1%)
- ◇ クラゲたんけん (2.6%)
- ◇ 魚たんけん (2.6%)



#### ウ 活動の様子

- ◇ 「〇〇がしたい」「〇〇を調べたい」という目的が、とても具体的になった。  
(カニのはさみの働きを見る・クラゲの足を調べる・カニのはさみで紙を切る・カニのおなかの色を見るなど)
- ◇ 準備したものを活用するだけでなく、川に落ちていたものを利用して活動する子どもがいた。(棒・石・ゴミなど)
- ◇ 自分の目的を果たした子どもの中で、川のそばの階段を利用しながら、探検したことをクイズにして楽しんでいた。
- ◇ 活動にゆとりが生まれたのか、捕らえたり調べたりするだけでなく、砂・泥・ゴミなどまわりの自然を利用して、創作的な活動をして楽しんでいた。

#### エ 表現方法

- ◇ 絵と言葉 (51.3%)
- ◇ 紙芝居 (15.4%)
- ◇ パラパラまんが (17.9%)
- ◇ げき (7.7%)

◇ 模型を利用 (5.1%)

◇ 動く絵本 (2.6%)

(4) 『川』に対する意識調査の結果から

探検する事前事後に、『川』について子どもたちにアンケートをとった。その結果から、今回の探検活動がどのような意味があったか探してみたい。

Q 1 『川』は、どんなところですか？何をするとところですか？

Q 2 『川』と聞いて、どこの川を思い出しますか？

① 家の近くの川 ② 休みの日に遊びに行った川 ③ その他

Q 3 『川』と聞いて、どんな川を思い出しますか？

① 大きな川 ② 小さな川 ③ きれいな水が流れる川 ④ 汚い水が流れる川  
⑤ その他

Q 4 『川』で遊んだことがありますか？

① よく遊ぶ ② あまり遊んだことがない ③ 遊んだことがない

Q 5 『川』でどんなことをして遊びましたか？

[Q 1 について]

◇ 『川』を人とのかかわりでとらえる子どもが多くなった。実際に探検活動したことをもとに、具体的にイメージできるようになった。

(ゴミがいっぱい・カニをつかまえる・足がズブズブ埋まる など)

[Q 2・3 について]

◇ 事前では、休日に家族と過ごすときに、魚を釣ったり、川辺でキャンプしたりするきれいな大きな川をイメージしている子どもが多かった。

◇ 事後では、事前のイメージを持ちつつ、汚い水が流れ、泥がたまっている猿猴川のイメージが付け加えられた感じである。

[Q 4 について]

◇ 事前に『川』で遊んだことがない子どもが、30.8%いた。このことから、探検活動で見られた『川』での子どもの様子(=やりたいことがあるのにうまくいかない・いろいろな活動を思いつかないなどの)が理解できた。

[Q 5 について]

◇ 事前では、『川』の生き物を捕まえる遊び(魚釣り以外)がなく、川辺でちょっと遊んだだけの子が多かった。(水かけごっこ・石投げ・小動物を見るなど)

◇ 事後では、『川』の生き物を捕まえたことが、イメージとして強く残っているようである。

【実践2】—ぼくの わたしの えんこう川—

(1) 単元について

本学級の児童は、9月に3回猿猴川に実際に行った。そのときの子どもたちの活動の広がりには次に示す通りである。

回数	潮	活 動 内 容
1回目	干潮	生き物をつかまえる。(カニ・ヤドカリ・エビなど) 泥にはまる。
2回目	満潮	生き物を見つける。(クラゲ・魚) 川の周辺の音を聞く。
3回目	干潮	生き物をつかまえる。(カニ・ヤドカリ・エビなど) 泥を投げ合う。 泥団子をつくる。川の水位を観察する。鳥の観察をする。生き物を集めて水族館をつくる。泥にはまる。川の水に入る。

この体験活動で、先入観として「猿猴川はくさい」とか「ゴミがたくさん落ちていて汚い」というマイナスのイメージでとらえていた多くの児童が「猿猴川は生き物がたくさんいて結構楽しいところ」とプラスのイメージに変わったことが大きな収穫としてあげられる。猿猴川に実際に行き、自分なりの活動を行うことを通して、子どもたちは猿猴川と自分との関わりを深めてきた。家庭に帰っても、自分の地域の川で遊んでもよいかと親に尋ねる子どもも現れた。また、猿猴川へ行くというだけで、今度はどんな道具を持っていくか見通しも持てるようになってきた。これは、実際に自分が体験したからこそ、つかむことができた子どもなりの知恵といえる。

本単元は、子どもたちが体験を通して自分が一番印象に残っていることを自分なりの表現方法を選び、発表し合う活動である。表現の対象になるものも、表現方法も多種多様に広がることが予想されるが、自分がやりたいことを決める場や、うまく行かないという失敗の体験を大切にしていき、子どもの意欲が表現を通して高まっていけるように支援していく。そのために、低学年という発達段階を考慮し、各教科で学んできたことを想起する場を設定し、自分に合った表現方法を選べるようにしていく。この活動を通して、えんこう川がより自分の身近な自然としてとらえられ、親しみを持てるようにしていく。これらの観点から、以下の実践を行った。

## (2) めざす子ども像

- ① 身近な自然に積極的に関わりを持とうとする子ども
- ② 自分の感じたことを自分なりの方法を選んで表現しようとする子ども

## (3) 活動計画（全10時間＋常時活動）

えんこう川たんけんたい (4時間)		さくせんをたてよう (1時間)	ぼくのわたしのえんこう川 (4時間)	
(1時間)		(1時間)	(4時間)	(常時活動)
【目的意識をもった体験活動】	【体験のふりかえり】	【表現方法の選択】	【表現活動】	【発表】
<ul style="list-style-type: none"> <li>・〇〇をさがしてみよう</li> <li>・〇〇をしてあそぼう</li> <li>・〇〇をつくろう</li> <li>・〇〇をあつめよう</li> </ul> 他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・えんこう川では〇〇が一番心にのこったな</li> <li>・友だちにも教えてあげたいな</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いままでにあんな勉強をしたな</li> <li>・あの作戦が自分にピッタリだ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・絵をかこう</li> <li>・作文をかこう</li> <li>・音をあつめよう</li> <li>・動きをまねしよう</li> <li>・図鑑をつくろう</li> <li>・えんこう川でできるあそびの本をつくろう 他</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これが、ぼくのわたしのえんこう川だよ</li> </ul>

## (4) 子どもたちの反応

### ① 「えんこう川たんけんたい」

ここでは、目的意識を持った体験活動を重視した。つまり、この探検では自分は「〇〇をさがしてみよう。」「〇〇をしてあそぼう。」「〇〇をたくさん集めよう。」など、はっきりと事前に明確にしておくのである。ここが、9月の体験と大きくちがうところである。これまでの子どもたちの活動は、はじめに示したとおり、探検に出かける度に内容がふくらんでいった。その場でのその子のひらめきや友だちの模倣が大きく活動内容に影響を与えた。今回は、事前のプリントに自分のやりたいことを書く活動を行った。必然的に準備物も自分に応じたものを持っていかねばならない状況に立たされ、一人ひとりが真剣に計画を練っていた。多かったのは、「泥玉合戦」でそのために汚れてもよい服を着ていくのはもちろん、学校に帰って着替えるため

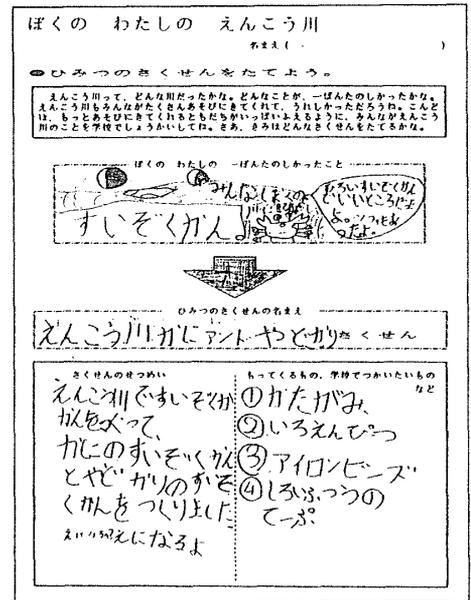


の下着までも見通しを持てる子どもも現れた。たくさんの貝殻を集めて首飾りなどのアクセサリーをつくりたい、という子どもも多かった。家で船をつくってきて、えんこう川で走らせたという子どもも現れた。活動計画を事前・事後を含めた見通し持ったものにほぼ全員ができたといえる。

今回が合計で4回目に当たる実際の体験活動は、これまでにない積極的なものであった。9月の探検を振り返る場面で、泥玉合戦の思い出を体験者が楽しそうにみんなに発表した影響と、汚れてもよい服装を用意し、泥まみれを覚悟してきたからこそその活動であったと思われる。全体的に計画していた活動内容は、猿猴川に行つてすぐのうちに終わり、あとはその場での自由な体験活動になっている児童が多かったようである。中には帰る時間になるまで、川の水の近くまで何とか歩いていき、必死で家で作ってきた船を浮かべて走らそうと試みる子どもの熱心な姿も見られた。

### ② 「さくせんをたてよう」

ここでは、これまでに各教科を含めて学習してきたことを振り返りながら、自分の表したいことが一番に伝えられる方法(作戦)を自分で選択・決定する活動を重視した。国語科で学んだ文章表現、図工科で学んだ絵画、工作的表現、体育科で学んだ身体表現、音楽科で学んだ音表現などいろいろな学習場面を想起させながら、自分にピッタリの作戦を決められるようにした。すでに見通しを持って活動していた子どもは迷うことなく決定できた。しかし、予期せぬ出来事になかなか決められない子どもも数人現れた。予期せぬ出来事とは、貝殻がほとんど落ちていなかったことで、これを使って何かつくりたいと考えた子どもたちは、一人かろうじて集められた子ども以外は、全員軌道修正を余儀なくさせられた。だがこのことによる大きな表現意欲の低下は見られなかった。



### ③ 「ぼくの わたしの えんこう川」

ここでは、前時の計画を実際に表現する活動とそれを子どもたち同志で発表し合う活動を行った。これに伴う準備物も、子どもたちの自己決定の場として、各自が表現に必要な材料や道具を計画するようにした。教室ではいろいろな大きさの画用紙や色画用紙、上質紙などの紙類は自由に使えるようにしておいたり、コの字型に席を配置し、真ん中の空間で劇表現をしたい子どもが自由に使える空間を用意するなどの場の工夫を行った。この表現活動のさらなる意欲づけとして「来年の1年生が見たときに、早くえんこう川に行ってみないなあと思ってもらえるような発表にしていこう」という言葉かけも行った。

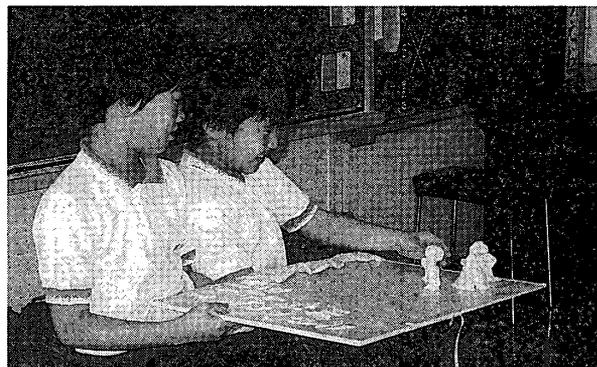
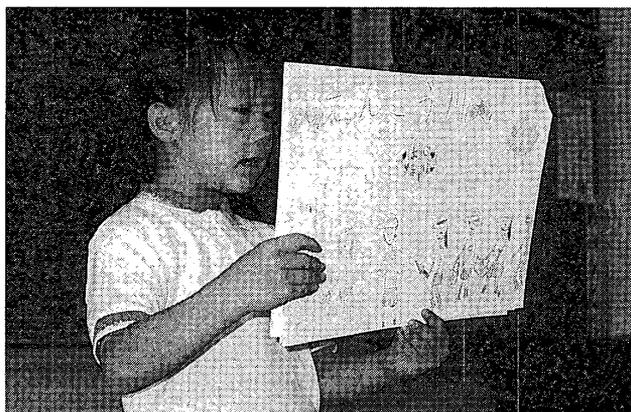
表現したい内容はあるし、どうやって表現するかも計画を立てていたのだけれど、実際にやってみるとなかなかうまく行かない、という子どもは見られなかった。ただ、一人でやろうとしていた子どもが同じようなことをしようとしている子どもと共同でやり始める姿はいろいろ見られた。実

表現した体験活動の内容	表現方法	児童数
カニをたくさんつかまえた。	紙芝居、絵日記	5グループ (15人)
猿猴川に紙の船を浮かべて遊んだ	貼り絵	1人
貝殻をたくさん拾った。	ひもとゼロハンテープでネックレス	1人
おもしろい首を集めた。	首を当てるクイズ	1人
はじめは怖くて触ることもできなかったカニをついにつかまえられるようになった。	顔仕立ての一人芝居	1人
猿猴川の水に絵の具を混ぜて、色水をつくった。	紙芝居	1人
猿猴川の生き物を集めて水族館をつくった。	紙芝居	1グループ (3人)
カニを飼育して、えさや動きの特徴を観察した。	画用紙1枚もののレポート	1グループ (3人)
猿猴川にはたくさんカニが住んでいて、カニの穴がいっぱいあった。	粘土で立体的に再現	3人
猿猴川の砂でバケツでプリンをつくって遊んだ。	作り方を紙芝居風に表現	1人
猿猴川でいろいろな生き物を見つけた。	紙に絵をかき図鑑風に表現 工作で立体的に表現 粘土で立体的に表現	1人 1人 1人
猿猴川にいろいろなことを考えた。	作文	1人
泥玉合戦をして遊んだ。	紙芝居、絵日記、ペープサート 泥玉を丸めた紙に黒コンテをつけて再現	4人 1人

<子どもが表現した体験活動と表現方法>

際の表現活動は、右に示す通りである。

発表会は、総合的な学習の時間と常時活動で少しずつ行っていった。自分の発表は一生懸命になっていたが、他の発表を聞く場面では、なかなか真剣に聞いていないことが多かった。実際の体験から時間が経つほど、この傾向は顕著に表れた。子どもの発表し合う時期を早める工夫が必要であったように思う。



#### 4 成果と今後の課題

##### (1) 成果

- ① 猿猴川での活動を通じて、自分から環境に向けていろいろと積極的に働きかけることの楽しさを味わうことができた。
- ② 学習の流れである『準備・取り組む内容の選定・活動・片付け・表現・振り返り』を自己選択・自己決定しながら活動することができるようになってきている。
- ③ 探検隊という体験学習を通して、子どものもつ隠された力を見つけることができた。『子どもらしさ』を再発見することができた。

例) ◇ 自然、特に生き物についていろいろな興味や知識をもっていた。

◇ 教科学習で日頃消極的な子どもが、大胆に活動することができた。

◇ 子どもの発想でいろいろな大発見をすることができた。

◇ 川で見つけたものを工夫しながら創作的に楽しむことができるようになった。

◆ 逆に川で遊ぶ体験不足から、生き物を捕まえられなかったり、準備物をなかなか決められなかったり、計画どおりにいかなかったりしていた。

- ④ 日ごろの教科学習とは違い、子どもにとって何かゆったりとした楽しい一時を過ごすことができた。

##### (2) 課題と問題点

- ① 総合的な学習の中での『活動の表現交流』のしかたが、まだ教科学習の授業の枠にとらわれている感じがする。もっと言えば、型にはめた表現交流は必要ではなかったのではないか。表現にあまりこだわると、活動意欲の低下にもつながる恐れがある。
- ② 初めは、体験活動（探検）を楽しめばという点が教師の心の中で大きかったが、学習が進むにつれて、『探検隊の大発見』と知的な面を求めることが大きくなってしまった。1学年という段階では、少し早過ぎてしまったのではないだろうか。
- ③ 『隊長の大発見』で様々な疑問が生まれてきたが、その疑問をどのように解決の方向へ導

いていくのか考えていく必要がある。

- ④ 猿猴川の活動は出発点であり，そこから発展するような活動の導入，評価も必要な気がする。（長期休業中などに向けて）
- ⑤ その他
  - ◇ 複数の先生がかかわっていくほうが，いろいろなパターンで学習を進めることができ，個々への対応が保障できる。
  - ◇ 今回の探検で足の裏をケガした子どもがいたので，対応を考える必要があった。
  - ◇ 保護者に総合的な学習について理解を求めないと，不都合な面が生じるので，学校全体として理解を図る手立てが必要である。

## 5 おわりに

猿猴川に行く日，子どもたちは朝からとても楽しみにしていた。用もないのに，家から持ってきた網やカゴや双眼鏡などを持ち歩いていた。そのときの子どもたちの表情は，とても生き生きとしていた。もちろん，猿猴川からの帰り道も，友達同士いろいろあったことを楽しく語り合っていた。子どもたちは，環境と触れ合って，いろいろな心の宝物を手に入れたのではないだろうか。環境が与えてくれた喜びだけではなく，今まで気づけなかった自分の隠れた力を少しずつ実感することができてきたからではないだろうか。